

最初に、このインターンシップを通して色々教えてもらった七沢リハビリテーションと国際病院の医療従事者、そしてこのインターンシップの実現にサポートいただいた皆様に感謝申し上げます。

AOI七沢リハビリテーション病院およびAOI国際病院でのインターンシップレポート

令和5年8月30日

初めに

6月末から7月の半ばまでの3週間、AOI七沢リハビリテーション病院とAOI国際病院でインターンシップをさせていただきました。以前から医療の道に進みたいと思っていて、将来の方向性を探るためである。このレポートは各職種の実習の中で学び経験したことや各々の医療従事者が何を大事にしているかなどに着目した。その上で、コロナ禍での医療従事者の苦労や工夫についても着目した。日本政府は新型コロナウイルス感染症の分類を2023年5月8日にクラス2から5に引き下げ、その後、日本は正常な状態に戻りつつある。このため、医療従事者がコロナ禍においてどのように医療の最前線に立ったかについても非常に興味を持った。最後に、七沢リハビリテーションと国際病院の医療従事者が話してくれたやりがいについてまとめた。

外科医師（脳神経・心臓・血管）

経験・学んだこと: 国際病院では、脳動静脈奇形、慢性硬膜下血腫そして腹部大動脈瘤の三つの手術を見学させてもらった。脳動静脈奇形の手術前に、脳神経外科部長がナイダスや毛細血管等のブリーフィングとともに脳外科手術の中でも難易度が高い手術であると説明してくれた。以前から脳について興味があったため、モニターに映し出される生身の脳に見入ってしまった。手術を見るだけでも貴重な体験だったが、途中

で顕微鏡で実際の脳を見させてもらい、今でも忘れられない光景となっている。脳動静脈奇形手術後、脳血管造影検査を見学した際に奇形が綺麗に取り除かれているかの確認も見学することができた。数日後、タイミングよく緊急手術で慢性硬膜下血腫の手術を見学できた。頭蓋骨に小さな穴を開け硬膜と脳の間でできた血腫を吸い出す手術だったが、約30分で手術が終わり素早い手さばきを見ることができた。最後に腹部大動脈瘤の手術を見学し、人工血管の縫い合わせまでの一通りの術式を見ることができた。その後、複数の経皮的冠動脈インターベンション（PCI）の治療を見学させてもらい、狭心症や心筋梗塞について学べた。手術室とカテーテル室では、多くの医師の方が忙しい中、丁寧に説明してくれた。手術や治療中の見学はあっという間に時間が過ぎる感覚だった。一定の集中力、細かい手さばき、長時間の手術中の体力、看護師や助手との連携、手術後の患者との寄り添い、など外科医師は知識以上に幅広いスキルが必要とされるのを目の当たりにした。

手術室看護師

経験・学んだこと: 脳動静脈奇形、慢性硬膜下血腫、そして腹部大動脈瘤の手術の際、オペ看護師の活躍を見学することができた。手術室の看護師は器具出しの看護師と外回り看護師の主に二つに分かれている。

器具出しの看護師は執刀医の手術進行を先読みし、必要とされる器具を素早く手渡す。脳動静脈奇形の7時間越えの手術の中でも、看護師は一定の集中力で器具出しを続けていた。外回りの看護師はガーゼカウントや手術記録などを行っていた。手術室看護師は手術時間の数時間前から器具台の整理をしていた。手術看護師は臨機応変に対応できる知識や技術が必要不可欠であることを学んだ。

Covid-19: 手術用の医療器具は滅菌状態であり、入念の手洗い、ガウンやキャップの着用をコロナ禍前から装着していたため、あまり変わりはなかったという。他の医療従事者と同じく外出の際は人混みを極力避けて行動していたと聞いた。

療養病棟看護師

経験・学んだこと: 私にとって療養病棟の見学は印象が強かった。寝たきりの患者や呼吸器など管や点滴の数などにびっくりし治療後でも元通りの生活に戻るのはいくく少数の方々ということを知った。患者がもう自分の意志を伝えられない状況となった場合、ご家族が安らかに見送るため栄養など延命治療を選ばない方がいると看護師は話していた。帯同した一人の看護師は「正解はない。一人ひとりの患者とご家族の決断を私たち看護師は尊重しサポートしていくのが使命だ」と話していた。

Covid-19: 一人の療養病棟の看護師は「一人の患者さんには色々な医療従事者の方がチームのように行動している」と話していた。これによって病院内での感染のスピードが速く、AOI国際病院ではほとんどの階がクラスターの発生を経験した。病棟封鎖などが起こると身動きをとるのが難しくなり業務を終わらすのが遅くなってしまったそう。

内視鏡看護師

経験・学んだこと: 内視鏡室では胃カメラ、大腸カメラ、複数のポリープの摘出などを見学し、胆石についても学ぶことができた。「検査中に患者さんのご気分などの異変に気づいてあげる」ことが内視鏡看護師として大事であり医師と患者の仲介役とも言っていた。内視鏡の構造などを見て実際に取って見たが、操作は繊細で思うように動かすのが難しかった。

Covid-19: 自宅待機など緊急事態宣言の中でもいつも通りのように病院に通い、使命感を感じて「行かなければ」と思ってたそう。患者を車・電話越しでの診断もあり、出来るだけ最低人数で行動していたと言っていた。コロナ禍では自分を感染から守ることも大事でありチームで連携して患者と向き合っていたそう。

急性期病棟看護師

経験・学んだこと: 急性期の看護師は他の医療従事者との連携の中で働いていることを学んだ。栄養サポートチーム (NST) のカンファレンスに同行し医者、看護師と栄養士が一人ひとりの患者の現況と今後の計画を話していた。その後、急性期の看護師は患者の入浴介助、点滴の入れ替え、モニターのチェック、空いてる時間があればSOAPの方式での看護記録などと絶え間なく動いている状態であった。

Covid-19: コロナ禍では個人防護具 (PPE) は欠かせずに着用していて、夏場などは暑くて動きにくかったそう。その上、ナースコールが鳴るたび、PPEのつけ外しが大変だったそう。一時期病棟ではコロナに感染した認知症患者の隔離などをしてきたが、封鎖されている部屋から歩いて出てしまうこともあったそう。

ICU 看護師

経験・学んだこと: ICU病棟では一人の患者に対しての多数のチューブやシリンジポンプ、人工呼吸器が装着してあり、私にとっては初めて見る光景であった。ICUでは患者一名に看護師二名という基準があり、患者のバイタルや血圧のチェックは数時間ごとのペースで行っていた。寝たきり状態でせん妄状態にならないように患者の心のケアも大事にしている。

Covid-19: ICUの患者は疾患の重症度が高く免疫機能が低下しているため、易感染状態である。どこに潜んでいるか分からないため、コロナ禍は「ずっと目に見えない菌と戦っている」状態であったようだ。コロナ感染でより重篤な症状に悪化してしまうリスクがあるため、ICUの看護師は感染対策を入念にしていたようだ。

ER 看護師

経験・学んだこと: ER看護師は、救急車から連絡が入ると消防士からの事前の情報を元に救急室を準備し、救急車の到着を待つ。到着した際、患者のAMPL（アレルギー・服薬歴・既往歴・最後の食事）について確認し救急処置に移る。状態が安定した後、検査に同行し病棟の看護師に引き継ぎした後、次の救急に備える。搬送数が多くなりベッドが満床となったときもあったが、看護師の間で任務を振り分けて患者の手当をしていた。ER看護師は一刻も争う緊迫状態の中でも常に平常心を保ち素早い判断力が必要とされることを目の当たりにした。

Covid-19: 他の医療従事者と同じくER看護師は救急車の出迎えの際、ドアが開け閉めするため、夏場などは防具服が辛かったようだ。ERチームも脱水しないよう水分補給を忘れなかったようだ。

リハビリテーション看護師

経験・学んだこと: 七沢病院では複数のリハビリテーション看護師から学んだ。看護師として全部手伝ってあげたい思うのだが、できることまでやってしまうと、患者のためにならないと話していた。看護師は年齢を考えた関わり方などそれぞれの患者の生活リズムを作ろうと努力している。床ずれなどができないように患者の体の向きなどを入念に変えて血流をよくするようにしていた。

Covid-19: 七沢病院に入院している患者は高齢者が多いため、免疫機能が低下している方々も多く易感染状態になりやすくなってしまう。免疫機能が低下しているとより感染が広がるのが早いため、集団感染が起らないよう対策を入念に徹底していたようだ。

透析室看護師

経験・学んだこと: 一般的な透析治療は週3回、一回に約4、5時間かかり、透析患者は仕事前や仕事帰りなどと仕事と治療を両立している。長時間ベッド上で過ごすのは患者の体に大きな負担がかかるため透析室の看護師は具合などを気にかけているようだ。国際病院での透析患者は何年も通院している方々が多いため、透析看護師は患者と信頼関係を築くのを大事にしていると話していた。

Covid-19: コロナ禍でも患者は透析を続けたいといけませんが、集団感染の恐れなどの葛藤があったようだ。隔離室を設けて扉で陰圧で感染症を防ごうとしていたが感染が広がり隔離室の数が足りなくなってしまったこともあったようだ。

緩和病棟看護師

経験・学んだこと: 治療ではなくがん患者の心と体の辛さを和らげ最期の時間を穏やかに自分なりに過ごせるようにと、緩和病棟看護師は日々努力し常に気にかけている。緩和病棟は日常生活に近い暮らしができるように作られている。国際病院での緩和病棟はカーテンの柄、壁のデザイン、花の庭園などと他の病棟と比べると雰囲気明るく違っていた。

Covid-19: 緩和病棟では、お茶会や他の患者と家族とともにイベントを楽しむことができる。しかし、コロナ禍で面会が制限され、患者同士の喋る機会も少なくなってしまう、緩和患者の家族に設けている家族室がコロナで使えなくなってしまうそう

放射線技師

経験・学んだこと: 放射線科では、色々なX線検査、バリウム検査、脳や腹部のCT、脳のMRIなどを見学した。放射線技師はいかにお手本のような写真を撮り医者の方々に見やすい写真を用意することを心がけている。国際病院での放射線技師によると、「発見しないと医療が始まらない」と言っていて、技師の高度な撮影テクニックや十分な経験に基づくノウハウが必要とされる。

Covid-19: コロナと疑われている患者でも色々な画像検査が必要なため放射線科ではクラスターなどが発生しないようにPPEなどを装着し検査を行っていたそう

臨床検査技師

経験・学んだこと: 臨床検査技師は外来と入院患者の生理検査と病理検査を行っている。病気の症状や薬の効果、危険因子の有無などの精密検査は、他の診療科の正確な診断に繋がると話していた。七沢と国際病院では心電図、超音波検査、呼吸機能検査などの仕組みについて学んだ。

Covid-19: 多くの患者が検査部に来るため、コロナの発生源にはならないように感染対策を徹底していたと言っていた。七沢病院の臨床検査技師によると、コロナ感染が拡大していた時期は患者と職員を合わせて、一日100人程のPCR検査を行っていたそう

臨床工学技士 (ME)

経験・学んだこと: 国際病院のME部では、輸液ポンプやシリンジポンプなどERやICUでよく目にする機器の仕組みや重要性を学べた。名前にはエンジニアとあるが機器のメンテナンスだけではない。呼吸器を装着している患者の入浴介助、手術室、カテーテル室病棟などMEは色々な場所で活躍している。ME部の部長は「医者の方々の隣にすることが多い。だからMEとは興味深い職種だ」と教えてくれた。

Covid-19: ME部は人数が少ない為コロナ感染で人員が少なくなると大変だったという。ICUで人工呼吸器を装着して24時間過ごしている患者もいるため、不具合などのときに機器に詳しいMEが必要であることから、コロナに感染しないよう心がけていたという。

薬剤師

経験・学んだこと: 薬剤師は四つの役割（処方、品質の管理、指導、そして調剤）がある。患者の服用歴などを見て相互作用が起こらないように、そして一緒の分包に入れても薬が化学反応を起こさないように調剤している。説明が必要なときは、病棟まで上がり患者に服薬指導なども行っている。通院患者には、その方のライフスタイルにあった服薬指導を気にかけているようだ。ヒューマンエラーを回避すべく、調剤時にはダブルチェックを行っている。

Covid-19: 薬剤部の一カ所から薬を出し外来患者や入院患者の病棟などに行くため、コロナの発生源にはならないように気にかけていたようだ。七沢病院の薬剤師の話によると、コロナ禍においてプライベートで極力外出や人混みを避けたと言っていた。

言語聴覚士 (ST)

経験・学んだこと: 国際病院で、STの失語症の患者とのリハビリに同席した。患者が話すことを諦めようとするのもあったが、STは「自分のペースで」と笑顔で励まして患者が再度話そうとしているのを見て微笑ましかった。STによると「私たちは患者さんと毎日1時間ほど一緒にいるため、良い関係性を築くことができるのがSTのよい所だ」と教えてくれた。

Covid-19: 言葉の発音の訓練の際に口やベロの動きを見せるのだが、マスク越しでは難しく苦労したようだ。七沢病院のSTは「唇を口笛を吹いているように」などと細かく説明してリハビリを行ったようだ。マスクやフェースシールドがあるため姿勢や視線などで患者の気持ちを感じ取るように工夫していたようだ。

作業療法士 (OT)

経験・学んだこと: OTは患者の日常生活動作 (ADL) を向上させるための訓練を行っている。関節の可動域や筋力の動作確認など徐々に介助を減らすのが目標である。リハビリではコップや洗濯バサミなど色々な器具を使っている。OTは患者の退院後の場所の気候 (例: 雪) によってリハビリを少しずつ変えているようだ。

Covid-19: 少し前までは集団療法などあったが、コロナ禍によりなくなってしまったようだ。OTとのリハビリでは色々な道具を共有しているため、消毒など苦労したという。病棟のコロナ感染で場所の制限があったが、色々な工夫をしてリハビリを患者と楽しんでいたようだ。

理学療法士 (PT)

経験・学んだこと: 患者を急性期から回復期に進ませるにはリハビリが必要不可欠である。リハビリ中はPTが励ましながら訓練を行っていて患者が笑顔でリハビリに励んでいる姿を見学できた。PTは機能が元通りにならないと言う見込みがあっても少しずつ目標に近づけるよう日々患者と向き合い支え続けている。

Covid-19: コロナ感染で隔離している間ではPTとのリハビリが出来なくなるため患者の筋力の低下に繋がったようだ。七沢病院のPTによると「1週間だけでもリハビリしていないと患者さんの体力が落ちてしまう」ということで、隔離前の体力・機能に戻すのは苦労したと言っていた。

栄養士

経験・学んだこと: 栄養士は個別対応を重視していて、一人ひとりの患者の好き嫌いや病状に沿って変えているようだ。嚥下訓練の患者や糖尿病、透析、肺炎、貧血、胆石、ネフローゼ、腎炎、高血圧、胃手術後など色々な病院食がある。飲み込み機能が低下している患者には経管栄養を行っているようだ。また、七夕、クリスマス、正月、郷土料理などの色々なメニューがあり、患者に少しでも食事を楽しんでもらうよう工夫をしているようだ。栄養士は患者とご家族に栄養指導を行い退院後の食生活を一緒に考えるようだ。

Covid-19: コロナ感染で隔離していると、リハビリする頻度が少なくなるため食事の量が減ってしまい患者が食べ切れる割合などが減ってしまうことがあったようだ。栄養管理のため、患者の状態を見て補助食品を足したりしていたようだ。コロナ禍では感染を防ぐためディスポ食器を使っていた時期もあったようだ。

相談員

経験・学んだこと: 七沢病院では相談員と交通事故にあった退院目前の方の家屋評価に同行した。患者が家に着いた途端、涙ぐむ姿など近所の方が家を飛び出してくるところを見て、私も嬉しくなった。病院は治療する場所だけではなく、どう「元通り」の生活に戻れるかを相談員が手助けている。「患者さんとご家族一緒に退院後の生活をゆっくり話しながら調整するのが相談員の役目」と言っていたのが印象に残っている。

Covid-19: 相談員はご家族の窓口であるがコロナ禍で家族面会を制限するのが辛かった

と言う。日に日に弱っていく患者もいるため、ご家族に少しでも面会をさせてあげたい気持ちが強かったようだ。コロナ禍での家屋評価はテレビ電話越しやメールのやりとりなどで難しかったと話していた。

地域連携室

経験・学んだこと: 他の病院との連携、紹介状、降り搬送など地域の医療の繋がりを果たしているのが地域連携室だ。地域連携室の方は「事務作業だが人の命と関わっていることに変わりはない」と話していた。

Covid-19: 国際病院の地域連携室は近隣の病院・クリニックへの降り搬送などを行っているがコロナ感染で患者が隔離期間の為降り搬送がスムーズに行かないことが多かったようだ。

医事課

経験・学んだこと: 患者と直接関わるのは少ないが病院がうまく機能するための様々な事務作業を行っている。医事課の方々はカルテ準備など医師や先生の負担を減らしたり、外来や入院の診療義務の流れの説明なども行っている。加点などの事務作業に医療知識がいる上で医療内容を学ぶのが楽しいと言う職員もいて、医療関係に携わる職務は色々あることを改めて認識した。

Covid-19: コロナなどの検査でのカルテの準備、リハビリ、看護師、患者と職員の検査など大変であったようだ。

以下に各医療従事者にやりがいについてのまとめがある。

〇〇としてのやりがいは何ですか？

「一人ひとりの人生を聞いてたり、家に帰る時の嬉しそうな顔、元気なところを見るだけで十分」 - 相談員

「目の前の患者さんと向き合える事」
- 心臓外科医師

「前は声が出れなかった患者が発する声で感動」 - 言語聴覚士

「日々感謝」 - 手術室看護師

「人工呼吸などで生きている患者さんも多数いる為責任感は重いけど、役にたつてい
ると言うことがやりがい」 - ME

「何もかも患者さんに期待されるのが嬉しい」 - 透析の看護師

「安全第一」 - 放射線科

「一番最初に画像を見れて原因を見つけ出すこと」 - 放射線科

「全部がやりがい、患者さんが少しでも回復、状態がよくなりそうな傾向になっている、数日後搬送された方が改善傾向になっていると聞くこと」 - 救急外来看護師

「表には出ないがご家族とは接するので家族の為に役立っている時」 - 医事課

「食事の管理や指導で患者さんの健康・改善に繋がったなどを見る、聞くと嬉しい」
- 栄養士

「無事に一日が終わること」 - 看護部長

「ここで最期を迎えられてよかったと聞く
とやりがい、穏やかな過ごしを見ること」
- 緩和看護師

「引きずる事も大事だけどいつまでたつてもとはない・患者さんの為に、チームの為にと頑張っている」 - 内視鏡看護師

「少しでも症状がよくなってくれたら」
- ICU看護師

「達成感・自分が医師に相談した上薬の処方が変わることもあり不利益の薬を患者さんへの調剤を止めた事」 - 薬剤師

「検査でわかった上で治療に繋ぐこと」
- 臨床検査技師

「患者さんに褒められること・助かりましたなど。自分がやった事に結果が見れること・家族と患者さんに喜んでもらう事」
- 作業療法士

まとめ

七沢リハビリテーションと国際病院でのインターンシップの3週間はあっという間だったが、貴重で大事な体験であった。病院とは常に他の部署との連携やすり合わせがあり、「チームによる医療」は病院で必要不可欠だと実感した。実習の中では責任感や使命感、そして患者のために熱心に行動できる医療従事者の姿を見ることができた。医療従事者は現場の急変に臨機応変に対応し前向き、そして笑顔で対応をする姿を目の当たりにした。インターンシップを通して将来は医療の世界に進みたいと言う気持ちが更に強くなった。今後、探求心をもって高校そして大学で医療の道に進むための勉強をしていきたいと思う。